
後部座席を見てみれば

牛髑髏タウン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後部座席を見れば

【Nコード】

N8048T

【作者名】

牛髑髏タウン

【あらすじ】

夜道をひとりで車を走らせているとき、誰でも想像することがあるだろう。誰もいない筈の後部座席に人影が……。

夜道で一人、車を運転している時、こんな想像をしてしまうことがあると思う。

誰もいない筈の後部座席に、ふと見ると人影が……。

もちろんそんなことはある訳がない。考えなくてもいいのに考えってしまう、もしもそうだったら怖いなという思いつきに過ぎない。しかし、いる訳がないじゃないかと自分に言い聞かせながらも、怖くてルームミラーに目をやることができない。

そんな経験は誰にもあるだろう。

ただその夜の俺はむしろ、けして怖い想像にとらわれていた訳ではなく、むしろ全く逆だと言ってよかった。妙に高揚した気分ですっと車内に意識を向けることもなく、ただ前だけを見て運転していた。

だからこそほんの一瞬目をミラーにやった時、そこに人影を認めた時は心臓が止まりかけた。思わず急ブレーキを踏んでしまった。

速度を落としながら、もう一度ミラーで後部座席を見る。

そうさ。

いたんだ。まさに。

そこには、女性らしき人影が座っていた。

俺は思わず叫んだ。

「ど、どこから聞いてた!？」

*

幽霊の類を見たのは初めてだったが、誰も乗せたことのないこの車の初のお客さんとなったこの髪の毛の長い、青い服の女性には妙に現実感が感じられなくて、俺はなんとなく、噂に聞いた例の怪談を体験しているのだということを悟った。

だが、問題はそこじゃない。
そこじゃないのだ。

俺はもう一度尋ねた。

「ず、ずっと………聞いてたのか？ 俺の歌を」

そう、俺はずっと、歌っていた。車の中というのは、これで実はかなり優秀なカラオケ施設である。案外防音がしっかりしていて大音量で曲をかけられるし、車外の雑音にも遮られない。一人で大声で歌っていても問題ない。街中で信号待ちしている時なら多少恥ずかしいが、何キロにもわたって分岐の無い山道、おまけに夜中でもわりに車がない。

それはもう、夢中で歌っていたのだ。ああ、認めよう。はっきり言って、ノリノリだった。何かが乗り移ったかのように。

動揺を隠しきれなかった。

俺の問いに戸惑っているのか、女は口ごもっている。俺はまだ鳴り響いていたBGMを止めた。車内が静寂に包まれ、エンジン音だけが静かに響く。

「なあ、どこから聞いてたんだ？」

もう一度、ミラー越しに後部座席の女に向かって尋ねると、彼女は静かに口を聞いた。

「ゲレンデが溶けるほど恋したい………からです」

「……最初からじゃねーかよお！」

自前で編集したプレイリストの一曲目からだった。

「……凄いテンションでしたね」

俺はガツンと額をハンドルにぶつけた。プオツとクラクションが鳴る。

「しょうがないだろ！ 誰かいると思わないさ！ 一人だっと思ってるもの！」

「でも一人なのにあんな大声で歌わなくても……。鼻歌とか、口ずさむとかのレベルじゃないですよ……」

「ああ、歌ったさ！ 全力で歌ったさ！ 広瀬香美大好きだからね

俺は！」

「でももうあなたの声で広瀬香美の声が全く聞こえませんでしたけど」

「いいんだよお！ 俺の中では鳴り響いてるんだよ俺の声であると同時に広瀬香美の声が！」

広瀬香美に失礼だったかもしれない。

「さすがにもうちよつと練習したほうが……。音程だいぶ怪しかったですよ」

女は大きなお世話を焼いた。

「うるせえ！ 大体あんた、いるならいるって言えばよ！ なんだよ三十分以上ずつと黙って聞いてたのかよ！」

「グレンデ……を熱唱したのはもうかなり前だ。ロマンスの神様も歌ったし、Promiseも歌った。」

「え、ええ。自分から言い出すのは格好悪いと思ひまして……」

「俺のほうがよっぽど格好悪いわ！」

「いえ、その、それほどでもなかったですから……」

「気を使われると余計にみじめだからやめてくれ……」

別に、ひとりのドライブ中に歌を歌うことなんて、誰にでもあることだ。それが俺の場合、ちよつとだけテンションMAXで、選曲が広瀬香美で、音程が外れているだけのことだ。何も恥ずかしいことはない。……誰も後部座席にいなければの話だが。

そう。だいたい……。

「……だいたいあんた、誰なんだ。なんでそこにいるんだ」

「……えーと、その……」

「幽霊か？」

「は、はい。そうです」

予想通りだった。まあもつ何でもよかったが。

「……ふう。頼むから、今度から盗み聞きするような真似はしないでくれ」

「え、ええ……す、すいません」

女幽霊が謝ったので、許してやることにした。気まずかったのはお互い様だ。

「聞いてると知ってりゃ、もっとちゃんと歌える歌もあるしさ。カラオケ好きなんだよ俺」

「あ、はあ……」

「じゃあ次は何いく？ ポルノグラフィティは？ 嫌いかな？」

俺は画面を操作しながら音楽を選ぶ。

「ポ、ポルノですか？ 大好きです」

「大好きか……。じゃあやめところ。ファンを敵にまわす訳にはいかな」

「う、歌うんですかやっぱり」

女は変なことを聞く。

「当たり前じゃないか。そりゃ歌うよ。今更嫌だとは言わせないぜ。勝手に乗ってきたのアンタなんだから」

「えーっ。そ、そりゃそうですけど……」

「ほら、助手席に來いよ。なんかタクシーみたいで寂しいだろ」

俺はそう言った。後部座席にいられると、どうにも話にくい。

「え、そんな、お気遣いなく」

しかし女は遠慮した。

「あ？ お前、俺が助手席に來いって言うてんのに」

俺はルームミラー越しに凄んでみる。

「で、でも私、その……」

「てめえ、大人しく前にこねえとポルノ歌うぞコラ」

「う、歌えばいいじゃないですか」

なんだと？ てめえ、いいんだな？ 後悔しないな？

*

俺はそれからしばらくポルノグラフィティを熱唱した。三曲目、ミュージック・アワーを歌いきったところで、女に向かって言った。

「どうだ？ 前に来たくなかったか？」

しかしルームミラーには誰も映っていなかった。あわてて曲を止めてみると、車内はシーンとしていた。

「何だよ……。どっか行っちゃったのか……。無賃乗車だな」

短い心霊体験だった。そんなに酷い歌だったか。

……。まあいいや。

幽霊というものに出会えたのもレアな体験だった。あんまり恐怖はなかったのを少し残念にも思ったが。

俺は再び一人になったのをいいことに、音楽にあわせて次のサウンドージを全力で歌うことにした。

歌にあわせて出せる限りの大声を出しながら、ついチラチラとルームミラーが気になってしまう。

「……。うおわっ」

いきなり、車の前に白いものが飛び出した。慌てて急ブレーキを踏む。

がくと揺れに揺れ、トランクに入れてある三角板か何かガタンと音を立てた。

ぶつけた訳ではなさそうだが、視界には既に何もいない。

「……………あ、あぶねえ……。なんだ？ 動物か？」

車を止め、ドアを開けて外へ出た。

……。周りを見渡す。道路の右側が、崖になっていることに気がついた。何だこれ、こええ……。ガードレール無いのかよ。落ちたら死ぬぞこれ。

キョロキョロとさっきの白い影を探す俺。

「……………大丈夫ですか？」

いきなり声がした。びくつとして驚く。さっきの女の声だった。しかし周りを見渡しても誰もいない。声はすれども姿は見えず。

「あんたか……。？ どこにいる？」

「え、目の前にいますよう。見えませんか？」

ヘッドライトで照らすが、目の前と言われても、ただ山道が続い

ているだけで誰もいない。対向車も後続車も全くない。俺の車と俺以外、何も無い。

「見えないな……。全く見えない。まあ幽霊だから……。俺はあんまり霊感がよくないんだ」

「そ、そうみたいですね……。えーと、じゃあちよつと頑張ります」とすると、目の前、俺の車のライトに照らされた道路の真ん中に、ぼんやりと何かが姿を現し始めた。だんだんとはっきりと像を結んでくると、人の形をしているのがわかる。さっきの彼女が半分透けていた。

だが車内でミラー越しに見たときより、ヘッドライトを正面から浴びているせいか、顔がはっきり見える。

「よう。なかなか美人なんだな」

「え、そ、そうですか。それはどうもありがとうございます」
女は頭を下げた。

「それにしてもなんだよ、人が歌ってるのを聞かずにいなくなっちゃったと思ったら、いきなり道路の真ん中に出てきたりして。危ないよ」

俺がそう言うと、彼女は怒ったように見えた。

「だ、だってあなた、歌うのに夢中で、全然声をかけても聞いてくれないんですもん。気づいてないみたいですけど、ここ、立ち入り禁止の道ですよ?」

言われて、俺は後ろを振り返る。

「マジ?」

「ええ。私、何度も声をかけたんですよ? 全然気づかないからもうどうしようと思って。この道、もうちよつと先行くと崩れてて崖に真っ逆さまですよ?」

「……す、すまん。全く気づかなかった」

道が分岐してたことにすら気付かなかった。

「もう。危ないところだったんですよ?」

彼女は頬を膨らました。

「あ、ありがとう」

「まあ、立ち入り禁止の札が倒れてましたし……しょうがないといえましょうがないですけど、気をつけてください」

俺はまた頭を下げた。

「俺はあんたに命を救われたんだな。さっきは失礼なことを言つて悪かった」

「い、いえ、失礼だなんてことはないです。あの、勝手に乗つてしまったのは私のほうですし……」

「それに、あんたの大好きなポルノグラフィティを侮辱するような真似を……」

両手の平をこちらに向けてぶんぶんと振る彼女。

「侮辱なんてとんでもないです！ 結構上手でしたよ」

「ほんとか？ あと、今超寒い。車に戻ってもいいか？」

彼女は苦笑した。

「で、やっぱり後部座席なんだな、アンタ」

「ええ、まあ……。その、実は直接よりも鏡越しのほうが姿を見せるのが楽なんです」

「そういうもんか？」

「霊ってそういうものなんですよ」

「そういうことにしておく。」

「……。なら後部座席のほうがいいか。隣じゃあミラーごしだと目しか見られないしな」

「ごめんなさい……。しばらく近くにいればあなたも靈感体質になってきて、直接姿を見せられるようになりますよ」

「まあ無理はすんなよ」

「お気遣いありがとうございます」

たしかに我ながら何の気遣いなのかよくわからないが。

「それにしても色々ややこしい仕組みがあるんだな、幽霊ってのは」

「しばらくこの状態でいますので……。だいぶ詳しくなりました」

「へえ……」

「あの、聞かないんですか？ 私のこと」

「そっぴや名前も聞いてなかったな」

「名前は、斑鳩玲子です」

「玲子さんか。幽霊だけに？」

「……いえ、あの生前から玲子ですから」

「はっはっは。冗談だよ。幽霊経験はどのくらいになるんだ？」

「ゆ、幽霊経験……？ え、いえ、まだ三週間くらいですけど」

「三週間で、まだ、なのか。幽霊道は案外長いんだな。幽霊になつてからずっとこの山の中か？ 寂しくないか？」

「寂しいです。ここ、車が滅多に通らなくて……」

「そうだよなあ。俺も、今晚もう五時間くらい走ってるけど、ほとんどすれ違わないもん」

「おかげで全然進まなかったんですよ」

「進まない？ ああ、このヒッチハイクのことか」

「ヒッチハイクっていうか、勝手に乗ってるんですけど。でもこんなに長いこと同じ車に乗っていられたのは初めてです。今日は今までにないくらい進めてます」

「なんだか嬉しそうだった。こっちも悪い気はしない。

「良かったじゃないか。……どこへ行きたいんだ？」

「山を降りたいんです」

「地縛霊とかじゃないんだな。どこへでも行けるのか」

「行けるんですが、車に憑くってというか……車に乗らないと移動できないんです。相性のいい車を見つけるのに苦労してます」

「相性？ もしかしてあんた、国産車って生理的に受け付けないのお、みたいなタイプか？」

「昔、そういう女がいたんだよ。」

「い、いえ、そういう好き嫌いの話じゃなくて……波長のあう車っていうか何ていうか……」

「よくわからんな。そんなに相性のいい車が少ないのか？」

「何日かに一台くらいです……。それに、乗っていられるのも運転手の人に気づかれるまでですし……」

「なんで？」

「気づいた人は慌てて車を止めちゃいますから」

そして彼女は、みんなすぐ気づいちゃうんですよ、と呟いた。

「俺もすぐ気づいたしな」

彼女はちよつと呆れた顔をした。

「よく言います。……三十分以上気付かなかったくせに……。新記録ですよ？ ……でもまあたしかに、あなたにみたいに気づいても慌てずに運転し続けてくれる人は初めてです。大体、まともに運転できなくて、そのまま乗り続けていると事故にもなったりして危ない

ですし……」

「やさしいんだな」

俺は素直に感心した。自分なら運転手が危なかるうが手段を選ばず行ける限り行こうとするかもしれないと思う。

「そ、そんなことありません……。普通です。幽霊なんかになってみるとわかるんですよ。こんな寂しい思い、他の誰かにもして欲しいなんて思いません」

「そうか……」

少し自分が恥ずかしくなる。

「まあ、だったら今日は乗ってけよ」

「そ、そんな……。山を下りるまでかなり距離ありますよ？」

「どうせ元からそのつもりだ。夜通しドライブのつもりだったんだよ」

「ではお言葉に甘えまして……。そういえば、名前聞いてもよろしいですか？」

「三沢荘司だ。荘司でいいぜ」

「では荘司さんと呼びします。荘司さんはどちらへ向かわれるんですか？」

「山をこえて、あとは考えてない。まあ気の向くままに走り続けてみるのもいいし、東京に帰ってもいい」

「そうなんですか？ 突然ですけど、彼女はいらっしやらないんですか？」

本当に突然だった。

「いないよ。いるように見えるか？」

「さあ、見えるとも見えないとも……。私、恋愛経験が全然ないのでその辺はよくわかりません」

「まあ、アンタから見て魅力的か、という判断でいいぞ」

「それ、プロポーズですか？」

……。

「いや、悪いけど全然違うな。なるほどアンタ、もう少し男性経験

を積んだほうがよさそうだな」

「そ、そうですかあ……」

「ああ、まあがっかりするなよ。アンタ、美人だからモテると思うぜ。……もう手遅れでなけりゃ、だけど」

「手遅れじゃないですかね」

「かもしれん。まあ、幽霊だしなあ」

いや待てよ。

「幽霊の男を探して恋人にするのはどうだ？」

「えーっ。一応、私、恋をするならちゃんと生きてる、元氣のある人がいいんですけど」

「贅沢を言うなよ」

「死人同士連れ添ったところで未来がありません」

「死んでもお前を守る！ いやアンタ最初から死んでるやん、みたいな夫婦漫才をやればいいじゃないか」

「バカにしてませんか？」

「してないよ。病める時も健やかなる時も愛することを誓いますか？ どっちも金輪際無いけどな！ みたいな漫才もできるな、とか思っていないよ」

玲子はうなだれた。

「酷い……。せっかくいい男を捕まえたと思ったのに」

そのセリフに俺は頭をかいた。

「おいおい、俺は確かにいい男だが、道連れにしてやるとかやめてくれよな？」

「あ、いえ、そういういい男ってことじゃなくて……。都合のいい男って意味です……」

「そうかそうか、あんたもいい性格してるよ」

俺は思わぬ旅の道連れを得たことを喜んだ。二人でにぎやかに、しばらく延々と細い山道を飛ばした。

また音楽を大音量でかけたりそれに合わせて大声で歌ったりした。

「あ、私、広瀬香美、結構得意ですよ、そういうえば」

「え、マジ？ 早く言えよ。カモン。歌いなよ。かけるからさ今
俺は画面を操作する。」

「運転中にいじると危ないですよ？」

「大丈夫大丈夫」

心配性の幽霊だ。

得意と言っただけあって、彼女の歌はうまかった。広瀬香美の高音
を見事に歌い切る。しかも、喋ってる時のオドオドした感じとは打
って変わって、ノリノリだった。そのギャップが楽しくて、テンシ
ョンが上がる俺。

「なんだよ、うまいじゃん。つーか、お前喋る時より声高いのな」

「え、ええまあ……。広瀬香美さんのファ、ファンを敵に回しませ
んでした？」

そう言っただけ俺の顔を伺う彼女。

「ああ、回してない回してない。うまいってば。しかしやっぱり女
に生まれた奴が羨ましいなあ。俺も高音が出せるようになりたいよ」
「裏声とか出せないんですか？」

「お前が最初に聞いてたあれが、俺が練習中の裏声だ」

「あ、あれですか……」

「お前は、音程が怪しい、と言ってくれたが……むしろお世辞
だよな」

「ええ……。実は……。はい、怪しいは控えめすぎでした」

「ああ、あれは怪しいじゃない、まるで完全に違っていた。明白す
ぎる。現行犯逮捕だ」

「……そこまで貶めなくても……」

「あのなあ、今だから言い訳するが、お前、あの歌は一人しかいな
いっていう前提あればこそなんだよ。誰かが聞いてたらダメなんだ
よ。それをなんだお前、幽霊なのをいいことに勝手に潜り込みやが
って。大体お前、シート汚したりしてねえだろうな。怪談とかで聞
くぞ？ 女がいた場所がびしょびしょに濡れてました、とか。アレ
は何なんだ？ お茶でもこぼしてるのか？」

「そ、そんなわけないじゃないですか。知りませんよ。私はシート汚したりしません!」

「ならいいけど……。あれはなんで濡れてるんだ?」

「雨とか……でしょうか? 幽霊は雨が降ってる時も傘もさせませんから……」

タクシーかよ。

「そんな濡れてたら乗車拒否されるぞ?」

「で、できるもんならやってみてくださいよう……」

「全くだ。できるもんならやってみたほうが面白いな」

その後、彼女にひと通りアルバムの全曲を歌わせた。

「いいね……うまい奴の歌を聞くのは」

「あ、ありがとうございます」

「いやあ素晴らしかった。久々に人の歌を聞いて感動したなあ」

「そ、そんなに良かったですか? そんなに褒めても何も出ませんよ」

「何も出ない、なんてまた古い言い回しだなあ。今どき誰も言わんぞ。あんた実は凄い年いつてるんじゃないのか」

「え、そ、そんなことありませんよ」

「何歳?」

「女性に年を聞くなと言いたいところですが十八歳です」

「若いな。俺は二十四だ……。だが俺の生きてる時代の日本では既に死語なんだ。つまりアンタは……本当は三週間前じゃなくて三十年前くらいに死んでるんじゃないか? その頃の日本ではまだ使われてた言い方かもしれない」

「嘘ですよ。私が物知らずだと思って馬鹿にしているでしょう。少なくとも三週間前まではみんな使っていましたよ」

「じゃあ、この三週間でその言い回しはすっかり死語になったんだ。ナウなヤングは誰も使ってない」

「……え? ナウなヤングって何ですか?」

……。

「……いや、俺が悪かった」

「え？ あの、どういう意味なんですか？ 私、その言葉を知らなくって」

「俺が悪かった」

「教えてください。それはいったいどういう意味の……」

「……いや、ツツコミを期待してたんだが……。まさか知らない、とはな……」

だが、ルームミラーを見ると彼女はいたずらっぽく笑っていた。

「そうだろうと思ひまして」

「このやるつ」

それからしばらくバカ話をして、なんとなく黙った。静寂。道には街灯さえない。

「なんか、暗い道が続きますね」

幽霊がポツリと言った。

「そうだな……。ちょうど県境くらいか。こっちのほうに来るのは初めてか？」

「そうですね……」

「少し休憩するか」

道路脇のスペースに車を止めた。寒かったが、エンジンを切った車の外へ出て、車体によりかかって空を見上げた。

「なんだ、山奥なのに、やっぱプラネタリウム程には見えないもんだなあ」

「雲があるんですよ」

声がしてから隣に彼女が立ったのがわかった。姿はまだ、見えな

い。
「靈感ってやつはまだついてないみたいだな」

「残念です」

「そうか……」

目を谷のほうへ向ける。

「ダメだな。こう暗いと何があるのか……。どこまでが山でどこから

が空かもわからん。面白くないな」

「目が慣れてないだけですよ」

「そうかもしれんがな……。だが夜景のすばらしさはやっぱり都会には敵わないな」

「そうなんですか」

そう言っただけで、下を向いた。

「……東京、行って見たかったな」

「行ったことないのか」

「ないです。ずっと……」

そう言っただけで、彼女は来た道のほうを見やっただけ。

「あつちの山むこうの小さな町で育ちました。高校までずっと家から通えるところでした。ほんとに……。あそこから出たことがなくて」

「田舎者だな」

彼女は笑った。

「酷い」

「方言は無いみたいだな」

「ええ、父も母も育ちは東京で、こっちへ移っても言葉が変わらなかつたものですから……。私も」

「そうか」

俺たちは車に戻った。

霧

「霧が出てきましたね……」

「そうだな……こりやあまずいな、先が全く見えない」

「こういう時に使う車の装置がありませんでしたっけ。私、名前だけ知ってますよ」

「ん？ なんだ？」

「たしかフォアグラとかいう……」

「ん……まあこういう時かどうかはともかく……確かに一度は食べたのかな」

「え、食べ物なんですか、フォアグラ……」

「少なくとも俺の知っている現代日本ではそうだ。世界三大珍味の一つでなあ。まあ、アンタの生きていた時代には何か別の意味だったのかもしれんが……」

「だからあ。たかが三週間前ですから。私を大昔の人扱いするのやめてくださいよ。フォアグラじゃなくて……ほら、霧の時に使う装置があるじゃないですか」

まあ、フォグランプをいい間違えているのはわかっていたが、黙っていた。

「あ、フォグランプ」

ちっ。

「悪いな、それは品切れなんだ」

「え？ ついてないんですか？」

「ついてるとディーラーのおっさんは言っていた気がするが」

「……じゃあ使いましょよ」

「知らないのか？ フォグランプというのは結構魔力を消費する魔法でな、まだレベルの低い俺には使えないんだ」

俺の洗練されたジョークに彼女は尊敬のまなざしを向けた。まるで人をあざ笑うかのような尊敬のまなざしだ。

「あの、もしかしてフォグランプをご存じないんですか？」

「いや、知っているぞ。フォグというのは霧という意味の英単語だ。ランプは灯り。つまり、霧の灯りだな。意味は不明だ。この言葉をどう解釈するかについては学会でも諸説入り乱れていて、まだ決着を見ていない。おいおい、そんな目をしてみても俺を誘惑することはできないぜ、子猫ちゃん」

「あの、頭の具合は大丈夫ですか？ これは誘惑しようとしてるんじゃないくて軽蔑を伝えようと試みているんですけど」

「なるほど、それならバツチリだ。伝わってる」

彼女は人差し指を立てた。

「教えてあげます。フォグランプって、こういう濃霧の時に視認性を高めるために使うものなんですよ。まあ、どう視認性が高まるのかは知らないんですけど」

「ふむ。そいつは……今、まさに使うべきものだな」

そう。馬鹿な会話をしている間にどんどんと霧が濃くなって来ていて、ちよつとシヤレにならなくなってきている。十メートル前が全く見えない。俺はスピードを大きく落として、徐行していた。

「だが、残念なお知らせだ。使い方がわからない」

「だろうと思いましたが……同じ車に乗ってるのが不安になってきますね」

「ダッシュボードにマニュアルが入っている。見てくれないか？」

「……えと、あの、すいません、幽霊なのでダッシュボードが開けられません」

「だろうと思ったよ……同じ車に乗ってるのが不安になってきますね」

彼女はムツとしたようだ。

「仕返しですか？ 私だつてできれば幽霊をやつてたくなんかないです」

「俺だつてフォグランプの使い方くらい知っておきたかったさ」

「一緒にしないでください」

「むう……」

気がつく、完全に視界ゼロだった。恐る恐る車を進めながら、懸命に周囲の地形を見落とさないように気を配る。俺が無口になると、彼女は場をつなぐように口を開いた。

「……あの、私が幽霊になった理由、聞かないんですか？」

「え？ ああ、言いたいなら言ってくれてもいいぜ」

「興味なしですか……」

残念そうだった。

「興味がない訳じゃないが……初対面の男に言いたいもんでもないだろう」

正直言つと、誰が相手でも自分が死んだ時の話なんてしたいものだとは思わなかった。俺なら話さない。

「私……東京の大学を……受けようと思ったんです……。都会に出たかったんです」

「でもダメでした。受験のために長距離バスで町を出ようとして……その途中で。バスが交通事故です。大型トラックとの側面衝突。バスに乗ってたお客の中で、運悪く私だけが……」

俺は、運転に集中するフリをした。

「私、気がついたらバスの外で一人立ってました。バスの車内で、誰かが泣き叫んでるのが見えました。私は車内に戻ろうとしたけどなぜか動けなくて、トラックの運転手とバスの運転手が言い争っているのを見ながら、私はここだよって叫んだのに、誰にも聞こえないみたいで……。それからしばらくして警察が来て。私、事故処理の様子もずっと見てたんです。私の声は誰も聞いてくれなくて、でも私の身体は運ばれていきました。頭から血が出ました。担架に乗せて運ばれる私を、ずっと離れて見てたんです。近寄ろうとしても近寄れないの。私を追いかけていかなくて言っても誰にも聞こえないの」

「……」

「事故処理が終わって誰もいなくなつて、それで私ようやく自分が死んじやつたんだつて思いました。そして……山道に取り残されたまま、行くことも帰ることもできなくなつちやつたんです」

「……帰ろうとしたのか」

「はい。でもやめました。私、どうせなら町を出てみたかつたんです。山の向こうに行きたかつたんです。だから……。ところが歩いてみたらダメなんです。数メートル歩くとすぐ疲れて、疲れると何時間も意識が飛んじやうんです。だから私、これからずっとこの山道で暮らすのかつて覚悟してました」

彼女は少し笑つた。

「でも、何日目だつたか……。一度、タクシーが通りがかつた時です。私、手を挙げてみたんです。へい、タクシー……。つて。そして、なぜかタクシーに乗つてたんです。知らないうちに。運転手さんが私に気付いて悲鳴をあげたんで、慌てて降りたんですけど」

「なるほど。それからは無賃乗車方式で行くことにしたのか」

「えへへ。お金があれば払いたいですけど」
別にいいけどよ、と言つた。

「なんか……。ごめんなさい、シンミリしちゃいましたね」

「全くだ……。誰のせいだ？ 責任とつてくれ」

俺は笑つた。彼女も笑う。

「あ、じゃあ私、歌います！ なんかかけてください！」

おしきた、と言つて俺は、大黒摩季をチョイスする。

「なんか選曲古めですよね……。ジェネレーションギャップを感じますなあ」

「うるせっ」

霧が晴れてきた。俺はアクセルを踏む。彼女が悲鳴をあげた。すぐに悲鳴は笑い声に変わる。それから曲にあわせ、大声で歌いだした。

「お前は古いとか言うわりにいけるのな」

「はいっ。娯楽といえればカラオケくらいだつたんで！ 古い歌は…

…お姉ちゃんとかと行ってたからですね

「そうか」

ひとしきり彼女が満足した後、俺もWANDSを歌う。

「そういえば莊司さんは東京から来てるんですか？」

「東京から来てるさ。なんでかは秘密だけど」

「教えてくださいよう。失恋とかですか？」

「はっはっは！彼女とかいたことねえよ！」

「……」

「……」

「……」

「……ちょ、おい、黙るなよ」

俺はルームミラーを見る。……と……。

「あれ？」

彼女の姿がなかった。

「……いねえし……」

俺は身体をよじって後部座席を直接見る。……やっぱりいない。

「お……い」

俺はどこへともなく声をかけたが、答えるものはいなかった。

「……本当にいないのか？」

一人呟く。やはり反応はない。

静まり返る車内。

「……なんだよ。寂しいじゃないの」

そういえばさつき、崖に落ちる危険を知らせるために出て行ったことがあったのを思い出し、俺は前方をよく見る。しかしいつの間にか霧は晴れ、ハイビームにしたライトに照らされて見晴らしのよい道が続いていた。

「もしかして、引かれたのか？二十四で生まれてから彼女無しは

……。気持ち悪いか思われたかな」

もう一度車内を見るが、やはり誰もいない。

「……まあ、考えてみりゃ第一印象から最悪だったしな……」

あのどうしようもない裏声もどきで広瀬香美を熱唱していた俺を
殺してやりたい。

しかし……。

「やべ、結構落ち込んでるな、俺」

誰もいない車内。彼女が乗ってくる前と状況は変わってない筈なのに、もう一人で歌ったりする気にはならなかった。

「それにしても面白い女だったな……」

恋愛経験はないと言っていた。なんとなく親に大事に育てられてたんじゃないか、という気がする。ずっと東京に行ったことないつても、親が厳しかったのだろう。

「親離れできてなさそうだったしな……」

なんとなく過保護そうな親を想像して、顔をしかめた。

嫌だなあ、そういう親がいる娘と結婚しようとなったら、挨拶に行くのなんか死ぬほど億劫だろうな。お前なんか娘はやらん、とか言われるわけだろ？ 最悪だな。

思考が横道にそれていく。

そもそもあの、親に挨拶に行くのって、必ずやんなきゃいけないもんなのかな。結婚するのは本人同士の合意があればいいって憲法かなんかに書いてあった筈だし、別に親に了解とる必要なんて無いのにな……。

まだまだ先の話とはいえ、俺もいつかドラマとかでしか見たことのないあの苦行を体験せねばならないのか。どんな顔して言えばいいんだ、あのお決まりのセリフ……。

俺は背筋を伸ばして、真剣な顔を作る。そして、何に向けたものかよくわからない予行練習を試みた。

「お父さん、娘さんを俺に下さい！」

プツ……。

……。

……。

今、何か聞こえたよな。

……。

俺は、静かに車を停めた。それから、後部座席を写しているルーミミラーに手をそえ、向きを変えて助手席が映るようにした。

「ご、ごめんなさい……」

口元に手をやり、泣き笑いのような表情でこっちを見ている彼女がいた。

「てめえ……姿を現せ」

低い声で言う。助手席に、次第に彼女がその姿を表した。

「……いつからだ？」

ドスの聞いた声で尋ねる。

「……さ、さ、さ」

「最初からか」

彼女は泣きそうな顔をしながら、頷いた。

「ただだだって、助手席に來ただけなのに、全然気付かないんですもん。面白いから黙ってたら……いつ気づくかなってワクワクしてたら、なんか独り言言い始めちゃうから言い出せなくなっちゃって……」

「ほほう。そりゃあ、さぞ面白かっただろうなあ。二十四の独身男の恥ずかしい独り言を黙って聞いているのは」

……俺は、極力怒りを声ににじませようと努力した。

「……ええと、その……すみませんでした」

彼女は深く頭を下げた。そして、その姿勢のまま、小刻みに震え始めた。

「ぶぶっ……。ご、ごめんなさ……。あはっ。ふぶっ」

俺は顔が赤くなっっていくのを感じる。

「笑うなあ！」

「だ、だって……。お、お父さん、娘さんを……。あははは、あははは
「い、言うな……」

「何の練習ですかあ？ あははは、あっは、あは」

「言わないでくれよ……」

それからしばらく彼女は助手席で笑い転げていた。俺は俺で、むすつとしたまま車を走らせた。

「はっ。ご、ごめんなさい……。ホントに、す、すみませんでし

た

「許せん」

「そういう予定のある人、いるんですか？」

「いないって言ったろうが」

「……ほ、ほんとご、ごめんなさい」

「ま、もういいけどよ……」

*

やがて、空が白んできた。山の稜線がはつきりし始める。俺は眠気を栄養ドリンクで打ち消しながら、ただ只管アクセルを踏む。

ガソリンもだいぶ減ってきた。平野部に出たら、給油しなくっちゃな、と思う。

「ところでお前、どこまで行くんだ？」

「……海が見たいです」

「海？」

「はい」

「見たことないのか？」

彼女が伸びをした。

「ないんです……。テレビでしか」

驚いた。

「お前、本当に山のむこうの町から出たことなかったのか？ 今どき高校生になって海を見たことがない奴がいるとは」

「うーん……。実を言うと、私、生前の記憶をだいぶ無くしちゃってる気がするんですよ……」

「そうなのか？」

「ほんとは、海も行ったことあるのかもしれませんが。でも、記憶にはないんです」

「そうか……。じゃあ、行ってみるか、海まで。なあに、平野部に出ればそんなに距離はないぞ」

彼女はやったーと言って喜んだ。

そして。朝日が見えてくる。山の向こう。

「朝だーっ。やっぱり朝はいいですよね」

「お前日光を浴びて溶けたりするなよ」

「しませんよーだ。私だって、夜より朝がいいです。あ、町が見えてきましたよ！」

その通りだった。山が両脇に去り始めるとともに、街並みが見えてくる。そして。

「海も見えてるぞ。わかるか？」

「え、本当ですか？」

「ほら、あのへんあのへん。空より少し色が濃いのが、わからないか」
俺がフロントガラス越しに遠くを指差すと、彼女は目を凝らした。

「あ、ほんとだ！ あれ、海かー」

海は……この旅の終着点はすぐそこだった。

俺はふと、助手席を見る。

鏡越しでなくても、彼女の姿が薄ぼんやりと見えていた。

「今、別に無理してる訳じゃないよな？ なんとなく俺の目にも、姿が見えてきてるぞ。霊感体質とか言う奴になりつつあるのか」

「本当ですか？」

「ああ。鏡越しじゃなくても見えるぞ。透けてはいるが」

「あ、危ないです危ないです、前見てください」

「お、おお……」

慌てて前を見る。

「……せっかく見えるようになったのに、もうすぐなんて、残念」
彼女が呟いた。

*

平野部を走る間、俺達はほとんど喋らなかつた。

途中一度コンビニに寄り、コーヒーを買った。玲子は車で待って

いた。

戻ってきた時、車に乗り込んでエンジンをかけながら、俺は言うことにした。

「失恋だよ」

助手席に座る玲子がかつちを向く。

「……はい？」

「だから、俺がこんな東京から離れたところでひとり、ドライブしていた理由さ」

「………彼女いたことないって」

「失恋したからな。彼女にもなる前に」

「………そうですか」

「ああ」

短く言って、俺は車を発進する。

「もしかしたらそうかなって思っていました」

「なんだよ、もてなそうだしってか」

「そうじゃないです……。なんか……。ううんと、まあ、その、なんとなくです」

彼女は黙った。俺も黙った。

*

「これが海だぜ」

俺は潮風に片目をつむりながら、彼女に言った。

防波堤の上の駐車場に車を停めておいて、下の砂浜に降りていた。

「はい」

「……感動したか」

尋ねると、彼女は首を振った。

「そうでもないです。……でも、なんか懐かしいって感じですよ」

「やっぱり見たのは初めてじゃなかったか」

「………わかりません」

俺は沖を見やった。何も無い。船も島も……何も無い海。少し波がある以外は。

「莊司さん」

玲子は、俺をじっと見て、そして言った。

「私、都会の夜景っていうの、見てみたかったです」

「ああ」

俺も視線を返す。

「莊司さん、東京に帰るんですよね」

「ああ、帰るよ」

「失恋の痛手は癒えましたか？」

癒えたのだろうか。何とも言えない。ただ、気持ちが大きく変わっていることは確かだった。

「まあな」

そう言つて、笑った。

「良かったです」

玲子も、笑った。

俺は、海を見て言った。

「東京に来るか？ 一緒に。……このまま乗っていけば、一緒に行けるんじゃないか？」

眠いが……このまま、東京まで車を飛ばすのもいいと思った。2、3時間だ。

「……いいえ、きつと無理です」

「そうか……」

彼女が言うなら無理なのだろう。

「その代わりと言ってはなんですが……最後のお願いですが、かもめが鳴いた。」

俺は彼女のほうを向く。

「聞いてやる」

頷いた。

「海辺を少し走ったところにある、白い建物に行つて欲しいんです」
彼女は、そう言った。

方向を彼女に尋ねながら、俺は言うままに車を走らせる。
五分とかならない距離だった。

白い建物。それはそこにあった。一目でわかった。

「ここか……」

「ええ、たぶんここに運ばれたんです」
病院だった。

「海つていうか、ここに来たかつたんですね、きつと私」

「最後の記憶がここから見える海だった……とか、か」

俺が言うと、彼女はですかね、と言って笑った。

「入るのか？」

「ええ。荘司さんはもう、いいですよ。ここで別れましょう」

「いや……待ってるさ」

そう言うと彼女は頷いた。二人で病院に入る。彼女の方は誰に咎められることもなく廊下を歩いていってしまった。

俺はなんとなくボサツとしているのも変なので、受付で訊いてみることにした。三週間前に運び込まれた女の子がいなかったか。女子高生で、名前は斑鳩玲子。そう言うと、ああそれなら、と答えが返ってきた。

「交通事故に巻き込まれた子ね。……ご家族？」

「いや、友人……です。その子は……」

しかし何を聞いたものかわからなかった。もう茶毘にふさげているだろう。お墓の場所でも聞いたら教えて貰えるものだろうか。

「303号室ですよ」

……。

「……？ え、何ですって」

「303号室です。お見舞いで来たのよね？ 彼女まだ意識は戻ら

ないけど、顔だけでも見てあげて」

*

ドアを開ける。

ベッドが一つだけ。その上に、玲子はいた。

さっきまでの青い服ではない。薄い水色のパジャマ。

寝そべったまま、首だけをこちらに向けていた。目を見開いている。

俺の後ろで看護婦が声を上げたのが聞こえた。慌てて医者呼びに行く。

俺はしばらく、部屋に入るのを躊躇っていた。

覚めてはいけない夢。そんな気分だった。

それでも。

「……玲子、か」

そう声をかけて。

俺はベッドに近づいた。

頭に包帯を巻いた少女は、目を瞬いた。

「……そう、じ……さん」

かすれた声だった。無理もない。三週間ぶりに身体に戻ったのだ。まだ喉がうまく使えないのだろう。

「無理をするな、身体、まだうまく動かないだろ」

玲子は頷くかわりに、瞬きをした。

俺はベッド脇の椅子に腰掛けた。

玲子を見る。

その顔は、もう透けてはいない。

鏡越しでなくても、はっきり見える。

ずっと彼女は……山を越えて、懸命に戻ろうとしていたのだ。自分の身体へと。諦めずに……。

そしてついに、たどり着いた。

「良かったな」

玲子は瞬きをした。その両目から伝う一筋の雫。

「偉い」

「そう……じさ……の、おかげ」

「お前が頑張ったんだよ」

俺は玲子の手を握ってやる。

「退院したら、連れてってやるよ。都会の夜景、見せてやる」

玲子の手にかすかに力が籠った気がした。

飲（前書き）

続編を書くにあたり、別作品とすべきかどうかを迷ったのですが、設定上ここまでの部分のネタバレを含んでしまう部分もあり、独立作とするのはどうかかなと思いついて、章分けをして連載の続きという形にしてみました。一度完結としたものを続行してしまう形になってしまい、申し訳ありません。

飲

昔の友人、真崎とはなんだかんだで付き合いがあり、たまに酒を飲む仲だった。遊びといえば酒を飲む以外にも色々あるにも関わらず、酒くらいしか奴と俺をつなぐものはない。

真崎は俺と違って交友関係も広く、俺とサシで飲むこともあれば他に誰かいることも多い。あまり大勢で騒ぐことが得意ではない俺だが、そんなことは構わずに奴は飲み会があればたまに俺を誘ってくる。奴のおかげで俺も大勢で飲むことに慣れた。

今日も飲み会だと言われて誘われた。

しかし、待ち合わせの改札口に着いた時、俺は騙されたと思った。真崎と、知らない男が一人。それから……知らない女が三人。

その五人の導かれし者たちに俺という六人目の仲間が加わった時、何が起るのか。俺は瞬時に理解した。これは、もしや噂に伝え聞くアレではないのか。自分が来てはいけない場に来てしまったことを悟る。

俺も情報屋の端くれ、そういう集まりがあるらしいことは知っていた。しかしそれはサンタクロース等と同じように、実際には存在しないものだと思っていた。「サバト」「仮面舞踏会」と並んで「物語にしか登場しない、現実には存在しない三つの宴」の一つに数えられている、あれである。

「もしかして、合コン？」

俺は、妙におしゃれな格好をした真崎の奴に小声で聞いた。真崎は親指を立てて片目を強くつぶった。おそらくは親指で目を突いてくれという意味のジェスチャーに違いない。

俺も二十五歳を迎えた男だ。こう見えて社交性は無い訳でもない。

初対面の相手と飲むことは真崎とつきあっていればよくあることだ。酒も飲めない訳ではない。

ただ……女性は、苦手なのだ。伊達に、二十五年間彼女を作らずストイックに生きてきた訳ではない。当たり前だ、伊達や酔狂でそんな生き方してたまるか。女性を楽しませるような能力を持ちあわせていないのだ。

とはいえ、ここでだだをこねて帰る訳にもいくまい。恐らくは独り身で寂しい俺に出会いの場を提供しようという真崎の優しさもあるのだろう。感謝を込めてあとでたっぷりとお礼をしてやりたいところだ。

「じゃ、行きましようか」

真崎は女性陣の先に立って歩いて行った。女性陣はなんとなくこつちをチラチラと見ながら、あるいは互いに話しながら、真崎についていく。

自己紹介とか、そういうのは店についてからなのか。俺は一人、いまいち勝手がわからない。

「あの子、さつきからこつち見てっすよ」

いきなり話しかけてきた奴がいた。真崎といた、もう一人の男だ。俺とは初対面。赤いジャケットが目痛い。言われて男の指差すほうを見ると、女性の一人が俺の視線に気づいてか、くると背を向けた。長い髪がウェーブしている。茶色い。最近の女は皆同じ髪型になるな、と俺は思った。

「なんか皆若そうだな」

俺は隣の男につぶやいた。女性陣は皆、なんか二十歳そこそこくらいに見える。真崎は俺とタメだが、この男も俺たちと同じくらいか？ 男どもに比べて女性陣はだいぶ若い気がした。

「え？ 真崎さんだけじゃないすか？ 僕は二十歳っすけど、真崎さんだいぶ上っすよね」

と思ったらこの赤ジャケも見た目より若かった。

「……俺も真崎と同じ二十五だよ」

俺は無然として言う。真崎がサバを読む気だったらどうしようと思いつながら俺は年をばらした。

「マジっすか？ 女の子たち、大学一年らしっすよ？」

「マジっすか？ 若すぎっすよ。」

「……いいんすかねえ」

何かいけないんすかね。

「おーい、お前ら、何遅れてんだよ」

いつの間にか距離を開けられていた。慌てて真崎たちに追いつく俺と名前も知らない第三の男。

「やれやれ。帰りたいな……。絶対気疲れするだけで終わる自信があった。」

*

「かんぱーい！」

合同コンパ、略してゴーコンが始まった。

俺たち男三人は「とりあえずビール」。俺の右隣に赤いジャケットの謎の男が座り、その向こうに真崎がいる。前に並んでいる三人は右から、レモンサワー、カシスオレンジ、スクリュードライバーを頼んでいた。……スクリュードライバー？ 自らレディキラーとは……。

「じゃー自己紹介。俺はタダト。エミコちゃんは知ってるよね」

口火を切ったのは真崎だった。なんとなく皆、笑う。女性陣はやはり真崎のツテか。エミコちゃん、というのがどれかわからないが、それが女性側の幹事らしい。

「僕はマザさんの後輩でフミヒロって言います。よろしく〜」

真崎と俺の間に座った赤いジャケットの男はフミヒロというらしい。……えーと。

「三沢荘司と言います。まあ、何と呼んでくれても。真崎の友達です」

固い……のが自分でもわかる。愛想笑いを浮かべたつもりだが、うまくいった気がしない。

「エミコです。真崎さんとはとある縁で会いまして」

俺から一番離れたレモンサワーの女が全く情報量の無い自己紹介をした。ショートカットの黒髪。肩を出した赤いドレス。全体的に攻撃的な印象。美人ではある。

「ヒロミです」

真ん中のカシスオレンジの女だ。ポニーテールで、黒いドレス。ちゃんと食べているのか心配になるほど細い。どうでもいいが、苗字を言わないのがルールなのか？俺一人だけバカみたいじゃないか。

最後の一人、俺の前に座っている、スクリュードライバーを頼んだ女に皆の視線が集まった。さっきのウェーブの髪の女だった。白いワンピースにベージュのカーディガンを着ている。

「……？」

何だ？何も言わずに俺を、見ている。しかし好意的な視線ではない。完全に睨んでいる。

こういう場では普通の男は淡い期待を抱いたり、淡くない期待を抱いたりするものなんだろうが、俺はそれどころではなかった。落ち着かない。早く終わって欲しい。それが態度に出てしまったのだろうか？だからこの女は睨んでいる、とか？私といて帰りたいなんていい度胸ね、的な。

三人とも困ったことに美人だった。真崎の手腕には感服する。だが、これは俺の勝手な印象だが、皆とつつきにくそうなタイプだと思った。自分が美人であることを自覚しているタイプ。男は自分を楽ませてナンボ。そういうタイプだ。であればすまないが、今日この場で俺にできることは黙ってビールをあけていく以外に何も無いだろう。

この感覚は……ああ、あれだ、久しぶりに帰った実家で無口で人見知りな親戚の子供を前にして、どう話しかけていいかわからずお

茶をおかわりしまくった、あの時と同じだ。俺は何も進歩していない。

「ちょっと……どしたのアンタ？」

レモンサワーを頼んだ女……えーと、エミコちゃんの声で思考が中断された。

自己紹介をしようともせず俺を睨み続けるスクリーンドライバー女に、皆の視線が集まっていた。

「あの……」

ふいに、話しかけられた。俺だ。身構える。

「は、はい」

俺は、完全に油断していた。

「何してるんですか？ 荘司さん」

……。

……。

……。

その時になってようやく気づいたのである。

「玲子じゃん」

*

玲子。斑鳩玲子と会ったのは、つい三ヶ月前くらいのことである。詳しく話すとややこしいので簡単に話すと、ぶらり一人旅の途中、とある田舎で出会った女の子だ。当時はまだ高校卒業前だった筈だ。彼女は入院中だった。交通事故で意識不明だったのだ。そして、事故のあと実に三週間に渡って意識不明だった彼女と俺が出会ったのは、山の中だった。

正確には、俺が出くわしたのは彼女の魂、つまり幽霊だった。生霊と言うべきかもしれない。とにかく、俺と出会ったその日、彼女は自分の身体へと戻り、目を覚ました。

病院で俺は彼女とまた再会することを約束した。玲子が携帯電話

を持っておらず、俺の携帯電話の充電も切れていた。

しかし、だからと言って、玲子の家の電話番号を紙にメモしただけだったのがまずかった。東京へ戻った俺は失敗に気がついた。

そのメモを無くしたのである。

そして俺は玲子のいる病院の名前が思い出せないことにも気がついた。

連絡を取る方法がない。そう短絡的に思い込んでしまった俺は、休みが取れ次第もう一度あの海辺のあたりへ行つて、記憶を頼りに病院を尋ねて回ることにした。

ところが、二週間後に目的の病院に辿りついた時、既に玲子は退院してしまっていた。

その時の俺が慌てすぎていたのがまずかったのか、病院側は俺をストーカーか何かと勘違いしたようだった。友人であるといくら説明しても、病院は玲子の家の住所も番号も教えてくれなかった。あるいはそういう情報は漏らせない決まりでもあるのかもしれないが、そして俺は……諦めた。

*

「合コン、ですよね、これ」

「まあ待て、落ち着け」

「荘司さん、私、来たんですよ」

「あ、ああ……ようこそ東京へ」

歓迎ありがとうございます、と玲子は全く笑顔を見せずに言った。

「私、ずっと待ってたんですよ、病院で。電話を」

「いやあの、メモ無くしちゃってな」

「なんで無くすんですか！」

「す、すまんとしか言いようがない」

「でも病院に問い合わせてくれれば良かったじゃないですか」

「そのな、どこの病院か忘れちゃまってだな」

「なんで忘れるんですか。どうして忘れられるんですか」

「いや、ちゃんと探したんだぜ？ わざわざもっかいあのあたり行

って、病院をかたっぱしから尋ねてさ」

「来てくれませんでしたよね」

「……だってお前、すぐ退院しちゃうんだもん」

「一週間はいました！」

「二週間後に行った時にはいなかったよ」

「下手な言い訳です！ どうして二週間もかかるんですか？」

「いや、なかなか都合がつかなくて……。病院も連絡先教えてくれないし」

「わ、私があの時どんだけ落ち込んだか……」

その時、おずおずと声をかけた人がいた。

「ちよ、ちよっとお二人さん……。取り込み中？」

エミコちゃんだ。

ふと横を見ると、フミヒロも、真崎も、怖い顔をしている。

「おい、莊司お前……。知り合いか？ どういう関係だよ」

俺は頭をかいた。参ったな……。説明のしようもない。

「前に海で会ったんだよ」

「ナンパかよ」

呆れたように真崎が言った。いや、違う……。と言いたかったが、じゃあ何なのかと言われるとよくわからない。

「こんな人知りません！」

玲子はスクリーンドライバのグラスを手に取ると、止める間もなく一気に飲み干した。

カントと音を立ててグラスがテーブルに着地する。

「斑鳩玲子です。よろしくお願ひします！」

玲子は俺を睨んだまま、皆に自己紹介した。

「ちよっと……。ルーちゃん、だ、だいじょぶ？ なんか、そっちの

彼……えーと、三沢さん、だっけ？ と何かあったの？」

ルーちゃんというのは玲子のこころらしい。

「無い！」

こええよ。エミコちゃん、ちよつと怯えてんじゃん。

「ま……まあまあ、玲子ちゃんもさ、落ち着いて。ほら、今日は盛り上がるう、な？」

真崎がフォローした。

しかしもはや、玲子の放つ怒りの波動によって場は完全に凍てついていた。導かれし者たちの中にこんな魔神がいただなんて。うっかり魔神の眠りを妨げてしまい完全にパーティのお荷物になってしまった俺は、隣のフミヒロと真崎に目で謝った。

今日の合コンは大失敗だ、と隣のフミヒロの顔には書いてあった。

*

しかし三十分後。

思いがけず、合コンはいいムードになっていた。

玲子が寝てしまったからだ。

そして俺は一人大人しく、ウーロン茶を飲んでいた。

玲子はスクリュードライバーの後、皆が止めるのも聞かずに次々頼む酒をあっという間に空にしていた。バーボン、テキーラと、強力な魔法を連発し、平和だった合コンは完全に大魔神玲子の魔力によって壊滅状態に追い込まれた。

しかし大魔神玲子はある酒の力に負けて眠りについた。こうして、世界に、もとい合コンに平和が訪れることになる。魔神に荒らされた世界を人類は急速に復興させていった。真崎は持ち前のセンスで笑いを取り、フミヒロは若さで勢いに任せておどけ、盛り上げる。エミコちゃんはノリが良かったし、ヒロミちゃんも物静かに見えて案外話好きで、四人は意気投合。

今日の合コンは大成功だ、と隣のフミヒロの顔には書いてあった。

俺は四人の輪に入ろうとはしなかった。魔神を目覚めさせてしまった張本人でもあるし、二対二で盛り上がっているのなら邪魔になるだけだ。

「それにしても……良かったな」

俺はしみじみとつぶやいた。

玲子が元気になる、こうして都会の大学に通っている。俺はそれだけで、本当に嬉しかった。

言い訳にしかないが、この三ヶ月、玲子を忘れていた訳ではない。会ったのは短い間、たった一晚の事だったが、俺はこんな面白い女はいないと思っただし、尊敬もした。玲子の努力には……感動さえ覚えたのだ。今こうして、東京に出てくることができているのはひとえに玲子の頑張りによるものだ。俺はそれを知っている。

「あれから大学を受けて……受かったのか。よく間に合ったな」

確か、俺と出会ったのが2月の頭のほうだった。それから一週間で退院したとしても、ギリギリだっただろう。

「無理……したんだろうな。あいつ、頑張るからな」

俺は目の前の席で突っ伏して寝ている玲子の頭を撫でてやった。

「悪かったな。こんな形での再会で……」

そうだよな、合コンの席で再会なんて……軽薄すぎるよな。お嬢様育ちのこいつからしてみりゃ、軽蔑の対象だろう。

……。

……んー？ 待てよ……。

……。

「って、人のこと言えるか。お前も来てんじゃねーか」

欲

玲子は眠りっぱなし、俺は黙りっぱなしのまま、合コンは一次会終了フェーズへと移ろうとしていた。

「どうやら真崎のほうはエミコちゃんと、フミヒロはえーと……誰だっけ……ああ、ヒロミちゃんだ……と。そんな感じで、2対2から1対1が二組という雰囲気になっていった。真崎とヒロミちゃんの席が入れ替わって、カップルはそれぞれ机に肘をついて隣席で向かい合う格好になっていた。俺は一人、ウーロン茶をすすりながら、ああ合コンでうまくいくってのはこんな感じなのか、と思って眺めていた。」

「ふわぁ……よく寝た」

玲子が脳天気な声で起きた。

「玲子……。起きたか。あのな、お前にちょっと言いたいことがある」

伸びをする玲子を睨みつける。

「あ、莊司さん、おはようございます」

おはようございますじゃないだろ。

「言いたいことは色々あるが……まずお前、酒強い訳でもないのにあんな強い飲んでんじゃねえよ」

「あ、そだ……。お酒……。あそうか、あれ、私、ここは……？」

こいつ……。記憶が無いとかいうんじゃないだろうな。

「おいおい、大丈夫かお前。酒飲んだ経験あんまり無いのか？」

まあ、考えてみりゃ未成年か。こないだまで高校生だった訳だし。まだ飲みかたを知らん、ということか……。

「え、まあ……。ほとんど初めてです」

「スクリーンドライバーが何と何を混ぜたもんか知ってるのか？」

「え、何かを混ぜたものなんですか？」

「ああ。無邪気さと凶悪さを混ぜたものだ」

「……わかりません……」

「バーボンのテキーラだの……。それが何かもわからず頼むんじゃないよ。まして合コンで……」

「あ、合コン！ そうだ、なんで荘司さん合コンに来てるんですか！」

「そうそれだよ。その話。お前な、俺ばっかり悪者にするが、お前だって来てんじゃねーかよ」

「え？ あ、いえ、違うんです。私は別に……」

「別に何だよ」

「と、友達が人数足りないからって強引にですね……」

ほほう……。俺は口を歪める。

「わかったわかった。いやあ、別にいいんだ。ああ、責めている訳じゃないんだよ、玲子くん。君ももう、花の女子大生だ。そろそろ男漁りを始めたい年頃だもんなあ？」

「ひ、人聞きの悪すぎる言い方しないでください！ ちょっと、合コンというのがどんなものか興味があっただけです！ 美味しいお酒だって飲んでみたかったですし！ で、でも、す、すぐ帰るつもりだったんです！」

必死に言い訳をする玲子。うーん何というか……若いな、と俺は急に微笑ましくなってしまう。

「いや何もすぐ帰っちゃうことは無いけどよ。……とところでお前、なんか顔色悪いけど、大丈夫か？」

「顔色……え、悪いですか？」

「悪いっつーか、なんか異様に白い……というか、透けてるな」

「え、透けてるんですか？」

……。

ぞっとした。

まさか。

嫌な予感がする。

背中をぬるい汗が流れる。

嘘だろ？

鳥肌が立つ。

隣のフミヒロを向く。フミヒロはヒロミちゃんと何か盛り上がっている。ちょいちょいとフミヒロの肩を叩いた。

「なんすか！」

すげえ怒られた。だがめげずに、玲子のほうを指さして尋ねる。

「なあ、玲子、目え覚めてるよな」

「どこがっすか！ 爆睡じゃないすか！」

そう言っつてフミヒロはうるさそうに俺を睨んでまた、ヒロミちゃんのほうを向いた。

……。爆睡。

「おい、玲子！ ちょっと来い」

「え、は……はい……」

玲子がテーブルを回りこんで俺の左隣に来た。

そして。

……俺の目の前の席にはやはり、玲子が寝ている。

もう間違いなかった。

「あれを見てみる」

俺に言われるまでもなく気づいたみたいだった。起きているほうの玲子が青い顔になった。

「え……私……？」

「そつだ。お前、また身体から出ちまつてる」

「……ええ？」

あの時と同じだ。魂だけが……行動している。幽霊、いや生霊の状態……。

「とりあえず早く身体に戻れよ。お前、飲み過ぎてんだよ。魂が酔っ払っちまつてるんじゃないのか？」

「……ち、違いますよう……！」

玲子が慌てて身体のほうへ駆け寄り、寝ている本体に重なるよう

にして椅子に座った。身体と同じ姿勢を取る。

「えいつ」

玲子は勢いよく身体を起こす。

「あれ、ダメだ」

身体が分裂するように見える。霊体はがばつと起きているのに、肉体のほうはついてこない。

「もうちよい、ゆっくり起きたほうがいいんじゃないのか？ 剥がれちまつてるぞ」

「せ、接着剤じゃないんですから……」

だがゆっくりでも急いででも、玲子の身体はぴくりとも動かなかった。いや、ぴくりとは動いてるか。呼吸に合わせて背中が上下している。生きてはいるみたいだが。

「ど、どうしたらいいんでしょう」

玲子が困っている。しかし聞かれても俺も困る。

「さて、そろそろ時間だな！」

突然のでかい声に驚いて振り向く。真崎だ。

「時間……？」

「一次会終わり、だね」

エミコちゃんが真崎の横で立ち上がった。そしてヒロミちゃんに意味ありげな視線を送る。ヒロミちゃんは僅かに頷いた。なるほど……。何やら意思の疎通が図られたらしい。

「玲子ちゃん……起きないな。莊司お前、送ってってやれ」

真崎が俺に向かってそう言う。

「あ、そうしてってよ、三沢さん。玲子、たしか蜜草寮だったっけ」
エミコちゃんが答えた。

「確かその筈です。蜜草ならここからタクシーに乗ればすぐですか」
「ら」

ヒロミちゃんも同意する。

「じゃ、決まりっすね。僕たち、二次会行くんで！」

フミヒロの一声に、おーっと四人は盛り上がっている。俺と玲子

はとつくに戦力外通告だ。それはいい。それはいいとして……。

……参ったな。

「玲子、お前、あの二人に連れ帰ってもらったほうが良くないのか？」

おれは横にいる（皆には見えないほうの）玲子に小声で話しかけた。

「えっと……ダメです。エミコにもヒロミさんにも、これ以上は迷惑かけられないです……。盛り上がってるみたいですし」

「迷惑かけていることを自覚しているのは何よりだ」

たしかにあつちはあつちで、カップルずつに別れてどこかへ行くつもりなんだろう。真崎とエミコちゃんなんて肩まで組んでやがる。フミヒロは少し飲み過ぎだな。足取りがおぼつかない。ヒロミちゃんもちよつと困ってる感じだが……苦笑しながら支えている。

俺はため息をついた。そして真崎に答える。

「わかった。玲子は俺が責任もって送り届けるから」

「やたつ。よろしくね、三沢さん。蜜草寮って言えばこちらへんのタクシーならわかるから」

「頼んだぞ、荘司。仲良くなー」

どつと笑う四人。立ち尽くす俺を尻目に部屋を出て行った。

「やれやれ……」

俺はテーブルに突っ伏したままの玲子の身体をかつぎ起こす。

「す、すみません……」

横でペコペコと謝る中身。

「謝るくらいなら手伝って欲しいがな」

「す、凄く手伝いたいんですけど……」

「う、重い……。お前、見かけによらず重いんだな」

「正体無くしてたら誰だつて重いですよ」

「しかも酒くせえ……」

「い、言わないで下さい……」

「まあ酒臭いのはお互い様だが」

俺はしゃがんで、椅子から背中に玲子の身体をどうにか乗せる。
そして立ち上がる。

「よ、腰痛になったらお前のせいだぞ」

「腰痛なんてまたまた。そんな年じゃないですよ」

玲子が笑った。本質的に脳天気なところはあの時と変わっていないようだ。安心した。

「お前、腰痛なんて遠い先の話だと思ってるだろ」

「違うんですか？」

「違う。今そこにある危機。それが、腰痛だ」

俺は重い玲子を背負ったまま、店員に挨拶して店の外に出た。勘定は真崎らが済ませたらしい。助かった。

「よっこらしよ」

店外に置かれたベンチに玲子の身体を腰掛けさせる。

「お前、牛乳飲んだほうがいいぞ」

「……………？　なんでですか？」

「いや、成長がな……………。まあもう遅いか」

「成長……………？　別にこれ以上身長伸びなくてもいいです」

「身長じゃなくてな」

「……………？」

霊体は、肉体とは反対側の隣に腰掛けた。

俺は玲子の身体をベンチに座らせたまま倒れないように支えつつ、タクシーを携帯電話で呼び出した。

「あ、待ってください」

電話を切った俺に玲子が慌てて声をかけた。

「なんだ？」

「今の時間に寮に帰るのはまずいです」

「……………は？」

「蜜草寮は女子寮で、その……………門限があるんです」

「もん、げん」

俺は、目を閉じた。

「やっぱお前、三十年前から来たんだろ。今の時代にそんなものがある訳がない」

「あ、あるんだからしょうがないじゃないですかあ」

「バカかお前。そんなもんがあるならどうして合コンなんかに来た」

「あ、いえ、ちゃんと事前に届け出れば外出も外泊も認められるんです。ただ、合コンなんて書けないんで……」

「適当な嘘書いときゃいいじゃねえか。お通夜とかさ」

「え、縁起でもないこと言わないでください！ 私、そういう冗談嫌いなんです」

まあそりゃ、嫌いにもなるかもしれない。あんな思いしたんじゃない。

「だから……私、今日は実家に泊まるってことにしてあるんです」

ふっ。こいつ、喋れば喋るほどボロが出てくるな。

「……お前、はなから外泊の予定か。さすがだな」

俺は、中身のほうを見ながらにやりと笑い、肉体のほうの頭をポンポンと叩いた。中身の玲子は首をぶんぶんと左右に振った。

「ち、違いますよ！ て、徹夜でカラオケとかもあるのかなって思ってただけです。途中で帰るっていったら盛り下がっちゃうかなとか、色々考えちゃって……」

「オールなんてするの学生のうちだけだぞ」

「私、思いつきり学生なんですけど」

そっぴやそっぴや。歳の差を感じる。

「私その、こういう夜遊びって初めてだし、勝手にわかんなくて……」

俺は苦笑した。

「夜遊び……ねえ。あのなお前、東京に来て浮かれてるのかもしれないが、ちよつと危機感持ったほうがいいぞ。合コンに来て酒がっくらって爆睡するなんざ、隙だらけもいいところだぜ」

「……え、ええ……。自分でもびっくりしちゃいました。お酒ってあんなになっちゃうんですね……」

「ペースの問題だよ。ウイスキーなんて割らずにがぶ飲みするよう
なもんじゃねえんだよ。下手すると……」

死ぬぞ、と言いつうになつてから慌てて言葉を引つ込めた。

「私、もうお酒なんて飲みません」

「酔っ払いはみなそう言うんだよ」

「し、失礼です。私、酔っ払いじゃありません」

「酔っ払いはみなそう言うんだよ」

「違います。私、意識ははっきりしています」

……ほー。

俺は、目の前で強く主張する幽霊から、視線を隣で眠りこけてい
る肉体へと向けた。

「はっきりしているのか……」

「……わーっ。違うんです。それは違うんです」

「お前、頑張つて大学入つたかと思えば、酒を覚えて、合コン行つ
て……。そんな生活がしたくて東京に出てきたのか。だいぶ俺の中
では印象が変わってしまったぞ」

「えっ。いやその……。すみません……」

「お父さんは悲しいぞ」

「いつ私のお父さんになつたんですか」

「玲子はもうちょっと真面目な子だと思つていたのにな、どこで育
て方を間違えたのやら……」

「そ、そんなの莊司さんが勝手に思つてただけじゃないですか……」。

それに私、友達の間では品行方正で通つてますよ。……たぶん」

「ふっ。それも今日までだがな……」

「なんでですか」

「今日のあの友達……エミコちゃんとヒロミちゃんだけ。あいつ
ら、お前がお持ち帰りされたつて思つてるぞ」

「お持ち帰りつて何ですか？」

……そう来るか。

「テイクアウトつて意味だ」

「……わかりません」

「ま、わからなくてもいいけど」

「教えてください!」

「気まづくなるからやめておいたほうがいい」

玲子はぼかんとしている。やれやれ。これは世代の差なのか、都会と田舎の差なのか、それともこいつが物知らずなだけか。

「じゃあ言わないでくださいよ」

まっただ。だ。

「さてと……じゃあどうするんだ？ほんとに実家帰るのか？」

「まさか……。こんな時間から行ける場所じゃないのは知ってますよね。大丈夫です。ちゃんと考えてます」

「そうか、ならいいが……」

まあさすがにノープランてことはないか。

「野宿します!」

……。

「……え、今なんてった？」

「野宿します」

ノープラン同然だった。

俺はデコピンをした。

「お前……東京なめてんのか」

「いたあ……都会なら二十四時間営業のコンビニもあるし、野宿しても飢えや寒さで死ぬことはないって友達が前に言っていましたけど」
「お前、結構お嬢様育ちかと思っただがな……そんな生活してたのか」

「と、友達の話です。私は野宿とか初めてなんで……初めてづくしですね」

あはっと笑う玲子。もう一回デコピンをした。

「悪いことはいわん。お前に東京はまだ早い。さっさと荷物まとめて帰れ」

「何をおっしゃいますか、私はもう東京ばな奈だって食べましたよ」

だから何だ。

「莊司さんは食べたことあります？ 東京ばな奈」

「無いな」

「ほおら、もう私のほうが東京マスターですよ」

「教えてやるう。東京マスターは東京ばな奈なんて食べないんだ」

「え！？ じゃあ何を食べるんですか」

「知るか」

東京マスターってなんだ。

「お前がいた田舎じゃあ野宿も平気だったかもしれないがな、東京で野宿はやめておけ」

「わ、私のいたところで野宿なんかしたら危ないです。下手したら野犬とか狼とかに襲われると思います」

わお。そりゃ危ない。

「でもな、東京にも飢えた狼がいるんだよ。若い女が公園で寝るなんて自殺行為だ」

「本当なんですか？ し、知りませんでした。東京にも狼がいるなんて……」

マジで言ってるのか……。

「……一応聞くが、お前の住んでたところにも隠喩ってあるよな？」

世間知らずなのか冗談なのかわからん奴だ。

クラクションの音が響いた。

タクシーが止まっている。

「仕方ない、とりあえずカラオケだな」

「え、カラオケですか！？」

「嬉しそうにしてんじゃねえ。ホテルにでも連れ込んでやるうか？」

「そ、それは困ります……」

歌

「次はあずさ2号歌ってください！」

「よしてきた！」

店員から見れば、カラオケボックスに気絶した女を連れ込んだ俺は要注意ということなのだろう。チラチラと覗いていくのが時々目に入り苛立つが、バツの悪さを勢いで打ち消すように、俺は熱唱し続けた。

歌っているのは俺ばかりではない。横たわる自分の身体の横でノリノリで歌う玲子の生霊。

「あ、おい死体が転げ落ちそうだぞ」

玲子の身体のほうがソファの上から床に落ちそうなのを俺は慌てて引き起こす。

「死体って言わないで下さい！」

俺は玲子の身体をきちんと寝かせ、合掌。

「ごらあ！」

怒る素振りをしながら、玲子は笑っている。

俺も笑って、ポケットから取り出したハンカチを玲子の顔に乗せた。

玲子が放った飛び蹴りは俺を通過した。

*

2時間ほど歌って、俺は肩で息をついた。

「ふーっ」

「歌いましたね〜」

「やっぱりその状態だとマイクが声を拾わないな」

「ですねえ。残念です」

玲子の声は今はこの世のものではないということか。靈感だか何

だかに依存するのだろう。

「……しかし、お前、変わったな」

「え？　そうですか？」

「いや、本当に最初、わかんなかったんだよ。髪型も全然違っし」
今更言い訳をする俺。

「長さは変わってませんよ？」

「そのウェーブだよ……だいたい、茶髪じゃんか」

「ええと……大学で知り合った友達に教えて貰って、美容室で……。
す、すみません」

謝ることじゃない、と言って俺は手を振って笑う。

「ただまあ、たった三ヶ月見ないうちに女は変わるもんだなと思っ
てさ」

「えと、もしかして不評でしたかね……」

がっかりする様子の玲子を見て、苦笑する。

「不評ってことはないぞ。人間、変化は大事だ。お前は進化してる
んだよ」

「は、はあ……。まあ、よくわかりませんが、褒められてるみたい
なんで、良かったです」

俺は横になる。

「疲れたなあ……やっぱ徹夜はこたえるわ」

「まだ日付またいだばかりですよ。全然徹夜じゃないです」
確かに。だが疲れは確かだ。

「さすが最近まで高校生をやっていた奴は違うな。眠くないのか」
「うーん……。今日に限っては、不思議なことに全然眠くならない
んですよ」

吹き出した。

「そりゃそうだ。不思議でもなんでもないな。この三年寝太郎め」

「三年……何です？」

「なんでもねえよ」

「なあ」

「はい」

「大学、楽しいか？」

「ええ、まだわからないことだらけですけど。とにかく、色んなことをやってみようって思ってます」

「そうか」

「莊司さんは……今、何をしているんですか？」

「今か？ カラオケボックスで横になっっている」

「……。今すぎます。もう少し長いスパンで答えてください」

「今、俺はホモ・サピエンスの進化の歴史の一部を担っているところだ」

「えっと……それ、たぶん私もです。てか長すぎです。何万年単位の話ですか」

わかりにくいボケもちゃんと捨う玲子。

「帯に短し襷に長し。帯も襷も長さのイメージがわかないと思わないか？」

「仕事はしてるんですか？」

無視か。うん、そこは無視でもいい。

「してるよ」

「何してるんですか？」

「そうだな……簡単にいえば、自分以外の個人または組織の、希望、要求、意志、そういったものに大なり小なり、貢献したり応えたり叶えたりするために、肉体や頭脳、道具や機械、各種資源や技術、能力、時間を費やして、代償として金を貰う、そういったことをしているな」

「どこが簡単ですか。ていうかそれ、どんな仕事にも当てはまることじゃ……」

「労働の定義かな」

「あの……もしかして私のこと、嫌いなんですか？」

「嫌いではないつもりだ」

「……ですか」

「お前は俺が嫌いか？」

「嫌いではないですけど」

「なら良かった。嫌いな奴と一緒にいるのは大変だからな」

「なら、私も良かったです。私と一緒にでも辛くないんですね」

「ああ。そうだ」

玲子はちよつと口ごもった。

「……うーん、でも、なんとなく壁を感じます」

「……感じるんじゃない、考えるんだ」

「逆です」

「逆じゃない。考えなければ、それは個人のものでしかない。伝えられるのは考えたことだけだ」

「酔ってるんですか？」

「眠いだけさ」

*

……。目が覚める。

時計を見る。午前三時。ずいぶん寝ていた。

「……………玲子？」

部屋が静かだった。玲子がいなかった。

「おい、玲子？」

身体のほうは……あった。元のまま、ソファに転がっている。

霊体のほうの玲子がいない。身体に戻ったということだろうか。

俺はソファの上の玲子に近づいた。

「玲子、お前、ここに居るのか？」

俺は玲子の身体をゆさぶった。

「……寝てるのか？ それともいないのか？ おーい？」

まったく、ややこしい奴である。

こうして見ると、少し化粧をしているのがわかる。そのせいもあるな、今日初めて見た時わからなかったのは。化粧も覚える年か……。

しかし……呆れるほど白い顔をしている。お白いだか何だかを塗りすぎ……という訳でもなさそうだ。肌が本当に白いのだ。これではまるで紫外線に太刀打ちできないだろう。

「少し焼いたほうがいいんじゃないのか」
それにしても、白すぎる。

……なんとなく、触れてみる。

……冷たい。冷たかった。

「な、おい、玲子！」

玲子が……冷たい。慌てて頬を叩く。

白いんじゃない……血の気がないんだ！

「おい、起きろ！ 玲子！」

……起きない。

中にいるわけじゃないのか？

「どこだ！？ 玲子、おい、どこ行つた？」

狭い部屋を見回すが、玲子の姿はない。

廊下に出る。玲子の姿は見当たらなかった。

「どこか行つたのか？ それとも身体にいるのか？ くそ、どうなつてんだこれ」

戻つて玲子の顔を見る。

妙だった。動いて……ない。まさか……息をしていない？

「ま、まじかよ！ おい勘弁しろよな！」

最悪の想像を振り払う。

背中を嫌な汗が滝のように伝つた。ソファの上で玲子の身体を仰向けにする。構わず服をたくし上げて鼓動を確かめる。

心臓の位置は……肋骨の境目あたり。

……とくん。

僅かに……僅かに、鼓動を手のひらに感じる。思わず安堵の息を漏らす。

「でも呼吸か！ くそ。なんで息してない？ 身体をほっぽったまま中身が出てって……時間が立ち過ぎたってことか？」

くそ。中身を戻せば回復するんだろうが……。しかしどこへ行っただかわからない以上、今のところアプローチできるのは身体のほうだ。

心肺蘇生法。自動車教習所で習った。もう何年も前で記憶がおぼろげだが必死に思い出す。

心臓が動いているということは……心臓マッサージはやらなくていい。やったらそれこそ死んでしまう。だが呼吸が止まっている場合は……。えーと呼吸は……。待て、本当に止まっているのか？ えーと習った確認方法があった筈だ。ガラスを鼻のところに当てて息でガラスが曇るかどうかを見るんだ。……ガラスを探す。ガラス、ガラス……視界にコップが映る。手に取る。急いで玲子の鼻に押し当てる。

ダメだ。もともと透明度が低いせいかわからない。馬鹿か俺は。他に適当なものも見当たらない。しかたないので直接鼻に手を当てる。……気を鎮めて、風を感じとろうと務める。

ダメだわからない。仕方がないので直接耳を当ててみる。

……無い！ 無いんだ。やはり、呼吸が無い……ようにしか思えない。

呼吸を回復させなければならぬ。

まずなんだ。なんだ。思い出せ。人工呼吸つていきなりやっていんだっけか？ 違う、まず気道の確保……だ。顔を真上に向けておでこに貼り付いた前髪を避ける。顎に指を当てて、のけぞらせるように頭を倒す。形の良い顎から喉のラインが浮き出る。

「くそ、あいつ、危ないなら危ないって言えよな……！」

そのまま様子を見るが変化はない。気道を確保すればそれだけで呼吸を回復することもあるというが……ダメか。えーと、えーと、

パニックになる頭を叩いて記憶を呼び起こす。そうだ、その前にたしか、口腔内に何もなかったことを確認しなくては……。吐瀉物が喉をふさいでいる場合があるとか。

「すまん、見るぞ」

玲子の口を開く。中を覗き込んだが特に異物は無いようにも見えた。が、一応、口の中に指を突っ込んでみる。……ひととおり指でかき回したものの、ひっかかるものは何もない。

「くそ、ぐずぐずしていると心臓も止まっちゃう……」

*

汗だくだった。

いや、これは汗じゃない。

涙……だった。よだれも混じっている。ぐちゃぐちゃだ。酷い顔だったろう。

「……………くそっ」

肩で息をついた。

「こんなことで……。なんて馬鹿な……………」
腕で背中を支え、天井を仰ぐ。

「……………！」

目が、あった。

玲子がこつちを見ている。

「そ、そうじさ……………」

何か言いかけた玲子を反射的に俺は引つつかんだ。掴めたことに俺は何故か戸惑わなかった。身体に押し込む。

「戻れ！ 戻れよ……………！ 何をやってるんだよ、お前……………せっかく取り戻した身体を……………あつさり捨ててんじゃねえ！」

身体から出てこようとすする幽霊の玲子を必死に押し込んだ。腹を抑えつける。今度は肩だ。肩を押さえれば足が。足を抑えつければ顔を起こそうとする玲子。

「そ、莊司さん……痛い、痛いです」

「戻れよ！ 戻ってくれよ……。お願いだから……！」

「い、痛い、痛いです！ そうじさ……痛い！」

……玲子の手が俺の顔を叩いた。

俺は頬の痛みで身を引きながらまだ左手は空をかいていた。

「痛いですつてば……。莊司さん……」

玲子が俺を見つめている。涙目。ソファの上で、俺を見上げている。

「れ、玲子……戻ったのか？」

「戻りました」

こくと頷く玲子。

「よ……」

「これはどういうことか……説明して貰えますか？ 莊司さん、返

答次第じゃただじゃすま……」

俺は安堵のあまり泣き出していた。玲子の肩に涙をたらしながら、鼻水をたらしながら。

「良かった……」

歡

「いや、だからそういうつもりは全くなかった。少しもない」

「言い訳なんかしないで下さい」

「言い訳じゃない。それはお前の勘違いだ」

「私は怒っていますし、傷ついてもいます。でも、許さないとはいっていません。こんな……段階を踏まないやり方をされるとは思っていますんでしたけど。私は莊司さんの気持ちさえはつきりして貰えれば……」

「いやいや、まあ待て。まず話を聞くんのだ。誤解なんだ」

「では、服を脱がされた上に体を抑えつけられて体中をまさぐられた場合に他にどんな解釈をすればいいと言うんですか？」

両肩を抱いて睨む玲子。その目には涙が……。おい泣くな。そして話を聞いてくれ。

「まさぐってた訳じゃない。服を脱がしたのも心臓が動いてるかどうかを確かめるためで……」

「脈を取ればいいじゃないですか！」

……！ おお。

俺はぽんと手を打った。なるほど。その手があった。

「莊司さんも男の方ですし、理性を抑えられないこともあるんだってわかってます。でも言い訳なんかして欲しくくないです」

「いやいや、待て待て。男の理性が最後には必ず欲望に負けるような言い方をするな。一般に男は女より理性的だし、俺はお前より理性的な自信がある。むしろ理性があったからこそ俺は冷静に対処できたんだ。俺は理性の塊だ。欲望を完璧にコントロールしている」

「嘘です！ 一次会の店を出る時、私の身体を背負ってた時だつて、胸のこと言っていましたし」

「気づいてたんならあの時ツツコめよ」

「さっき気づいたんです！」

……遅い。

「とにかく、我慢できなくなって襲ったって素直に認めてください」
「アホ。お前の薄い胸に誰が誘惑されるか」

「なっ。そ、そ、それは私と私の胸と私のお母さんと女性の半数を敵にまわす発言です！」

「お前と胸は別なのか。あと、なんでお袋さんが出てくるんだよ」
「私の身体のことと何か言つと、生んだお母さんが責任感じて悲しむからです」

「……わかった。悪かった。別に胸の大きさのことを言いたい訳じゃない。色気のある女なら、大きさによらずその胸も魅力的だ。はっきり言つて、お前には色気がない。細い手足と白い肌を武器にしているだけのお子様だ。そんなものは女の色気じゃない。マネキンと同じだ。そんなものに惹かれるのは表面しか見ない男だけだ」

「……な、何を……。きゅ、急にそんな、心にぐさつとくるようなことを言わないでください。ご、強姦魔のくせに」

「お前こそ人聞きが悪いことを言つな。まずはっきりさせておこう。俺は襲つてたわけじゃない。救おうとしてたんだ」

「何を救おうつていうんです」

「お前の命だよ。お前がどつかフラついている間に、身体から血の気が引いて呼吸が止まってたんだぞ」

「嘘です。荘司さんは私が痛いつて言ってるのに構わずに体中をまさぐつてました」

「だからまさぐつてたなんて言つな。違つ。お前を身体に戻そうとしてただけだ」

「抵抗できない相手の服を脱がしたりして……最低です」

「お前の心臓が服の外についてりや脱がしたりしねえよ」

「荘司さん……。私が、平気だとも思ってるんですか？」

……。玲子の目が細くなる。

「どつという意味だよ」

「わ、私、初めてだったんです」

「ん……いや、待て。奪ってない」
「奪いました！ 私が部屋に返ってきた時、私はつきり見ました」
「何を見てたんだ。俺は服を着てたじゃないか」
「そっちじゃなくて！」
「どっちだよ」
「自分で考えてください！」

*

その後、下らないやりとりをすること数十分。玲子はようやく緊急事態だったことを理解した。大人しくなった。

「あの……ほんとに危なかったんですか？」

「ああ」

「ご……ごめんなさい」

「……はあ。わかったか。全部不可抗力だ。そら結果的には服を脱がせたり触ったりしたかもしれないが、俺が責められるいわれはない。正直言うと、確かに責められるいわれは無いつもりだが、申し訳ない気もせんでもなかった。だがそれは今は言わないでおく。」

「……本当ごめんなさい。ついその、恥ずかしさとか、色々考えちゃったりして……」

俺は横になった。

「勘弁してくれよもう。こんな馬鹿なことで死ぬのかと思ったんだぞ」

「ご……ごめんなさい。私、全く自覚なかったんです」

「やっぱりあの状態は一步間違えば危ないな。できれば避けたほうが……。お前、下手すると離脱グセがついちゃってんじゃないのか」

「え……。そ、それは困りました……」

「フラフラ出歩きやがって……。どこ行ってたんだ」

「い、いえ……ちよっと」

「……夜景でも見てたか」

「……あ、わかりました？」

「もう東京来てひと月だろ。夜景なんざ見飽きたろう」

「いえ……私の部屋、一階ですし……まだちゃんとした夜景、見たことないんです。さっきも結局途中で戻ってきちゃったんで見てないですし」

「途中で引き返したのか？ 何で」

「やっぱり身体から離れすぎると厳しいみたいです。どんどん身体が薄くなってくのが自分でもわかって、怖くなって」

「ふーん……」

腕時計を見る。まだ閉店までは時間があるな……。

「……じゃあ、今行くか」

俺は起き上がって上着を肩にかけ、扉を開けた。

*

非常階段を音を立てながら上がっていく。

「莊司さん、あの……」

「なんだよ」

「私、莊司さんにまた会えて、嬉しいですよ」

「そうか」

「でも莊司さん、合コンとか行く人なんですな」

「どんな奴だと思ってたんだ」

「いえ……なんとなく、女の人に縁の無い人かと」

「まあ、無いが」

「合コンに来るってことは……彼女いないってことですよね、まだ」
「中にはそうでない奴もいるぞ。結婚してるのに来たりする奴もいる」

「でも莊司さんはそういう人じゃないと思います」

……。

なんか変な流れだな。

「お前、立候補するとか言わないよな」

「……………え、え、え？」

階段を踏み外しそうになった玲子を引つ張り上げる。

「……………どういう、意味、ですか？」

「なんか、そんなことを言い出しそうな雰囲気だなと思ってな」

「だ、だ、ダメですかね」

「まだ早い」

また足を踏み外す玲子。

「ええ……………何が足りないんですか」

「色気」

「そ、そんな……………」

俺は急に走りだした。カンカンと鉄板がうるさい音を立てる。

「あ、ちよっと、待ってくださいよう！」

*

「扉あいてるぞ。ラッキーだな」

ビルの屋上へと非常階段から登ってきてしまった。バレたら怒られるが構わず扉を開けて狭い屋上へと踏み出す。

「地上十階の眺めだ。まあまあだな。住宅街であまり灯りはないが

……………」

「わあ」

……………風が少し出ている。俺は上着を玲子にかけてやった。

「ありがとうございます」

「感動するほどの景色じゃないかな」

「そんなことないです……………」

長い髪が風になぶられていた。

「東京の街って終わりがいいですね」

「終わりがいい？」

「街がどこまでも続いています」

「そうか？」

「私の住んでたところだと、街がすぐ山に吸い込まれて終わっちゃうんです」

「……東京にだって果てはあるさ」

まあ、そうなんですけど、と玲子は言った。

俺は柵の隣まで歩いていき、振り返って言った。

「ようこそ東京へ。歓迎するよ」

玲子は俺の上着を胸の前であわせながら、頭を下げた。

「よろしくお願ひします」

*

午前五時という半端な時間にカラオケボックスは閉まり、俺たちは追い出された。始発にはまだ時間がある。

「牛丼でも食うか？」

「い、いえ……。気持ち悪いです」

「おいおい、今ごろ二日酔いかよ」

「二日酔いって翌日の朝来るものじゃないんですか？」

「そりゃそうだな。妥当か。ただお前ずっと元気そうだったからな」

「身体は寝てたんですよ……」

玲子が座り込んだ。

「おい、大丈夫か」

「い、いえ……。ちょっとダメかもです」

小走りに傍の塀の内側に入り込む玲子。

「お、おいちよと、どこ行く気だ」

建物には入らず、塀の内側で座り込んでいる。

「吐くんだったら、よその敷地に入っちゃまずいって」

しかし吐きはしなかった。しばらく肩で息をしていたが、立ち上がった。

「も、もう平気です……」

玲子を支えるようにしながら通りに出た。
と、そこで。

「莊司じゃないか」

声をかけられた。振り向くと真崎……と、エミコちゃんだった。

二人の視線が生暖かい。その意味に気づいて汗が吹き出してくる俺。

「エミコ……おはよう」

玲子が律儀に挨拶をした。

「おはようルーちゃん。アンタ、簡単な女ねえ……」

玲子、頭の上にでかいクエスチョンマークを浮き出させている場合じゃないぞ。反論しなくていいのか。

「あ、言っとくけど莊司、俺らはお前らと違って、さっきまで居酒屋で飲んでたんだ。結構気があつてさ」

真崎の言葉を聞きながら俺は玲子とたった今出てきた塀に書いてある文字を見ていた。ご休憩1時間3000円……か。

「ルーちゃん調子悪そうね。大丈夫？」

「だ、大丈夫……。ちよつと腰痛いけど……」

まあ本体はソファでずつと寝てたわけだからな。

「……あらま。お盛んね」

「おさかな……？」

エミコはばつちり何かを誤解し、笑って玲子の頭をぼんぼんと叩いた。玲子、だから不思議そうな顔をするとかじゃなくて。

「別にいいのよ。ところでルーちゃん、どうすんのアンタ。寮、帰んの？」

「うん……帰る。エミコは？」

「一緒に帰りましょ。じゃ、そういうことで、またね、まーちゃん
まーちゃんと呼ばれた真崎が頷いた。

「おー。またなー。じゃ莊司、帰るか」

俺は歩き出そうとして思い出す。

「あ、そうだ玲子……なんで、ルーちゃん、なんだ？」

玲子は振り返って答えた。

「いかるが、れいこ、じゃないですか私の名前。イカルガレーコ。縮んでガレーコ。それがカレー粉になって、カレールー。なので、ルーちゃんです」

「……そか」

「なんですか、期待外れみたいな顔して」

*

帰りの電車の中。閑散とした車内は早朝から行動を開始する人間と、俺たちのように活動を終えようとする人間とが入り交じった奇妙な空気だった。

俺は思い出す。

「電話番号……また交換すんの忘れたな」

真崎が笑った。

「何やってんだお前。……エミコから聞いたといてやるつか」
窓の外を流れていく東京の風景を見ながら俺は答える。

「今度はちゃんと会いに行くさ」

訪

トタトタと足音が響いた。

前を見ると、白い服の女がわき道へと駆けていくところだった。

一瞬、何かあったかと周りを見渡す。が、何も見あたらない。…それでようやく俺が原因だと気がついた。うかつだった。いつも夜道で女性が前を歩いていたら距離を取るようになっているのに。前にいるのが女性だという認識がなかった。てっきり猫か何かだと思っていた。やれやれとため息をつく。

月が出ていた。いや月なんざ大抵の夜には出ているものだが、逆を言えば月くらいしか都会の夜空に佇むものは無い。

そういえば、背中に気をつけるというのはどちらだったかなと考える。月夜だったか。それとも月の出ていない夜だったか。

素直に考えれば、刺客が見えにくくなる暗い夜すなわち月の出ない晩に気をつけるべきか。しかしそこまで真っ暗だと刺客のほうもターゲットを見失うだろう。とすれば気をつけるのはむしろ月夜なのか。

そもそも月が出ているから明るい、という感覚が古い。月が出ていようがいまいが夜はそれなりに暗く、しかし街灯があるので問題にならない、というのが現代の人間の感覚だ、という気がする。

バキバキと木々が音を立てた。神社の雑木林だろう。猫の集会所になっっているらしいが木の上にはずいぶん重い奴が登ったらしい。…そんなことを一瞬考えたが、きつとただの風だ。妙に風のある夜で、ちよつと近くの牛井屋に行くだけだと薄着で出たのが仇になった。寒い。

マンションに帰り着いた。そういえば、アパートとマンションの違いは何だったかな。たしか、木造だとアパートと言ったかな。いや三階建て以上でないとマンションとは言わないんだったかな。いずれにせよここはマンションか。考えているうちにエレベーター

ターは俺を4階へと運ぶ。俺の部屋は一番奥だ。

ポケットから鍵を取り出して、部屋のドアを開ける。室内に入り、鍵は定位置である靴箱の上の籠に入れておく。

それから電気をつけ……。

……。

……ようとして、俺は背筋が凍った。

音がしたからだ。声だ。誰かの、泣き声……涙をすすったような音がした。

暗闇の中、意識が一瞬で聴覚に集中する。部屋の中、何かがいるのかと目を向ける。そして硬直した身体に脳はようやく指令を出し、俺の右手は受けた指令に従ってスイッチを操作した。

「うおわ！」

思わず大きな声を出してしまった。手が震えていたのか電気のスィッチを何度も押ししてしまう。明滅の中に姿を現したのは黒い塊はうずくまった獣、子熊か何かに見えた。恐怖に後ずさるが玄関のドアが背中を打った。

全身が泡立つ。一瞬で額は汗の雫だらけになった。何を探しているのか、自分の右手が必死に壁を触っているのに気づいて手を止める。そして恐る恐る、部屋の真ん中に転がっているそれに近寄る。

「……な、何だ？」

もそもそその黒い塊が顔をあげるのを見てそれがようやく人だと理解した俺は、反射的に鞆を武器とすべく持ち直し、声をかける。

「誰だ」

「うっ……」

くぐもった声。女の声だった。

黒い塊に見えていたのは長い黒髪だった。そこにいたのはうずくまって泣いている女だった。

「……って……おま、お前か」

気が抜けた。誰だかわかった。見覚えのある格好だった。顔を上げる女。泣きはらした顔は知った顔だった。

「ひ、久しぶりだな。合コンの時以来か。玲子」

*

「お前、髪の色戻したのか。脱色はやめたのか？」

突然の訪問者のためにとりあえず場所をあげ、座らせる。

「荘司さん……助けてください」

「服もこないだと違うな。当たり前か。……何か飲むか？ お茶な

らあるぞ。菓子は無いが」

「あの、荘司さん話聞いてください」

「ああ、じっくり聞かせてもらうさ」

俺は台所で電気ケトルに水を入れてスイッチを入れ、茶葉を棚から取り出す。

「茶碗でいいか？ コップが一つしかないんだ」

「そんな、御気遣いなく……」

俺は茶碗とコップに二杯の煎茶を作りお盆に乗せてキッチンを出、玲子の前に座る。

「テーブルは無いんだ。床で勘弁な」

俺は自分のコップで茶に口をつけたが、玲子は茶碗に手を伸ばさうとしなかった。

「……台無しですね」

「は？」

見ると玲子がかすかに笑っていた。

「何が台無しなんだ？」

「……え？ あ、違うんです。ちょっと思いついちゃっただけで俺は不機嫌に茶をすすった。」

「そりゃ床に直置きなんて、育ちのいいお前からしたら信じられんかもしれない……。失礼ってもんじゃないのか」

「ち、違つんです！ そつじゃなくて……。その、テーブルが無い
つて言うから……。台無しだなあと」

「何が違つ……」

……。と、もしかして。

「まさかお前……テーブルつまり台が無いから台無し、ただけじゃ
ないだろうな」

玲子が斜め下を見ながら顔を手で隠していた。

「わ、忘れて下さい。私も言わなきゃ良かったと後悔してるんです
俺は茶をすすった。

「ま……変わってないようで何よりだ」

「は、はい……。ありがとうございます」

*

「まず、どうして俺の家を知ってるんだ？」

最初に質問したのは俺だった。

玲子はこのマンションの場所は知らない筈だ。近所に住んでいる
わけでもない。電車を二回乗り換えて40分くらいのところにある、
大学の近くの寮だった筈だ。

「夕方、美作駅で荘司さん見つけて……」

美作駅は最寄り駅から二つ三つ行ったところの駅だ。確かに今日
の帰りに、そこで乗り換えている。

……。てことはまさか。

「つけたのか？」

悄然と俯く玲子。俺は腕を組む。玲子は泣きそうな顔になった。

「ごめんなさい！」

深々と頭を下げる玲子を見て、俺は怒る気にはならなかった。何
も言えずに頭をかいた。

「その、なんだ。別に家を教えたくないって訳じゃない。声をかけ
りゃ良かったじゃないか」

歯切れが悪いのは、俺は俺で後ろめたかったからだっただって……。嫌われてるのかと思って」

そりゃそう思うわな。

「いや嫌ってた訳じゃない」

「じゃあどうして、また音信不通になっちゃうんですか！」

「そ、それは……その」

そうなのだった。

東京で、あるうことが合コンで再会したのが二週間前だ。再会した方がいいが、朝までいたにも関わらず結局再び連絡先の交換を忘れた俺は、最初に会った時と同じ過ちを繰り返そうとしていた。

いけなかったのは、合コンの帰りに一緒だった真崎がわざわざ番号を聞いというやろうか、と言ってきたにも関わらず、深く考えずに「会いに行くさ」などと言ってしまったことだ。

「いや、暇を見つけて会いに行ってもいいかとは思ってたんだが、つまりだな、その、どこに行けば会えるのかわからなかったんだよ」「なんでですか！ 今度は同じ東京に住んでるんですよ？ 私が通ってる大学も知ってるじゃないですか！」

「大学たって広いじゃないか。学部も知らないし。外部の人間が無闇にうるつくのもあれだしな」

「寮だつて知ってるじゃないですか！」

「いやさすがに女子寮に会いに行くというのは世間体が良くないだろう」

「じゃ、じゃあ！ あの、真崎さんでしたっけ、あの人に聞けば良かったじゃないですか。エミコとつきあってるみたいですし」

「それはまあ、そうなんだけどな」

それも考えはしたが、わざわざ改めて頼むと真崎がニヤニヤと冷やかしてくるのが目に見えていて嫌だったのだ。……とは言えなかったが。

「でも、それはお前だつてそうじゃないか。エミコちゃん経由で真崎に聞けば俺の番号を聞くことだつてできただろ」

俺は矛先をそらす。

「うっ……。その。だって」

口籠っている玲子。

「そ、そういうところは男の人が頑張るべきなんですよっ」

ああ、なるほど。そういうことか。

「そらそうだ。女としてのプライドがあるもんな」

女友達に、必死になって男を追っていると思われるのは癪だろう。玲子でもそういうのは気になるようだった。

「しかしお前、だからと言ってストーリーキングは良くないぞ」

「ス、ス、何てこと言っんですか！ 私がしたのはストーリーキングです！ ……いや、じゃなくて！ ストーキングもしてません！」

俺の言い間違いを何やら泡を食って訂正したのち、言い直す玲子。

「ストーリーキングは知ってるんだな」

「常識です」

「そうかなあ。俺は非常識な行為だと思っけどな」

「こ、行為は非常識です。言葉はその、一応知ってるだけです。…

…あの、からかってます？」

俺は頷く。

すぐさま抗議の声を挙げようとする玲子を、俺は手で制した。そしてまっすぐに玲子を見る。

「まあ待て。からかうことで見えてくることもある」

「……何が見えてくるんですか？」

「え。いや、まあ……お前が意外に耳年増なことか」

「……なるほど。私にも見えてくるものがありましたよ。荘司さんの性格の悪さとか」

それは結構。

「さてと。お前が昼間、俺をコソコソ付け回して家を突き止めるのに成功したのはわかったが」

「っ、つけ回したなんて。なんとなく声をかけそびれてるうちに、家までついて来ちゃっただけです」

「美作つて3駅隣だぞ。かけそびれすぎだ」

「ゆ、勇気が出なかつたんですよう」

声が小さくなる玲子。顔を落とす。

俺はコップのお茶を一口飲んだ。

「まあ……すまん。茶化してるだけで別に怒ってやしないよ。思春期の中学生男子がやりがちなことだし、いいじゃないか」

顔をあげた玲子。心外だ、という気持ちと、許されたのを喜ぶ気持ちとが混ざった複雑な表情だ。

「だがさすがに家宅侵入となるといただけじゃないぞ」

俺は言う。玲子は眉を釣り上げた。

「違うんです」

「何が違うんだ。俺が出かけるのを見計らってこっそり忍び込んだ訳じゃないか」

近くの牛丼屋に夕食に行った間だ。

「しょうがなかつたんです」

「何がだ。だいたい、どうやって忍び込んだ？ 鍵はかかってたぞ。間違いない。お前ピッキングでもマスターしてるのか」

「してませんよ！ 違うんです、本当は私、結局声をかけられなかったから、諦めて自分の家に帰ろうとしたんです！ でも、駅で改札に入ろうとして無くなってることに気がついて……戻ってきたんです」

「無くなつたって何がだ」

「ですから、こういうことです！」

そう言って、膝立ちの姿勢で俺のほうに近づいた玲子は、手を俺のほうにつき出した。

「……」

俺は目を見開いた。

玲子の細い腕はあっさり俺の胸につきささった。急速に鼓動が速まる俺の心臓の位置に玲子の左手が重なる。

「マジか……？」

「マジなんですよう……」

泣き出す玲子を見て、俺は今日二回目の大声を出した。

「どこに置いてきたんだよ！ 身体！」

今俺の目の前で話している玲子は、霊魂のほうだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8048t/>

後部座席を見れば

2011年9月26日03時10分発行